

|      |                                      |
|------|--------------------------------------|
| タイトル | 『苔の衣』穂久邇文庫本系統諸本について：前田家本系統諸本との比較を通じて |
| 著者   | 関本，真乃；SEKIMOTO, Masano               |
| 引用   | 北海学園大学人文論集(69)：226(一)-193(三四)        |
| 発行日  | 2020-08-31                           |

## 『苔の衣』 穂久邇文庫本系統諸本について

——前田家本系統諸本との比較を通じて——

関 本 真 乃

### 一、『苔の衣』 穂久邇文庫本系統諸本について

『苔の衣』は鎌倉時代中期に成立したと考えられる全四巻の作り物語である。現存する諸本はおよそ三十本であり、その本文は前田家尊経閣本系統・穂久邇文庫本系統の二類に大別される。稿者はこれまで、穂久邇文庫本系統の諸本について異同状況を確認し、分類を試みた<sup>(1)</sup>。その結果完本以外の諸本、上中下三冊本（巻二を欠く）、巻一・四相当本、巻三相当一冊本の計十四本はいずれも、完本である穂久邇文庫本もしくはそれに準ずる本を祖本に持つことが明らかになった。したがって穂久邇文庫本系統諸本を位置づけるうえで、完本である四本の本文を

分析することの重要性が確認された。

『鎌倉時代物語集成』および『中世王朝物語全集』がいずれも前田家本系統の本文を底本としていることもあり、『苔の衣』を読むとき、最近では前田家本系統諸本の本文を目にする機会が多い。対して穂久邇文庫本系統諸本では、書写年代が「室町時代中期」とされて最も古く、かつ古典文庫の翻刻のある穂久邇文庫本が専ら参照されてきた。穂久邇文庫本系統諸本の大半が穂久邇文庫本もしくはそれに準ずる本を祖本に持つことも相俟って、穂久邇文庫本こそがこの系統の最善本のように捉えられているのではないだろうか。

しかし麻原美子氏<sup>(3)</sup>はつとに、龍門文庫本が「穂久邇文

庫本の誤脱を訂正することのできる善本」であると指摘しており、穂久邇文庫本以外にも注目すべき本があることが示唆されている。

麻原氏以降、穂久邇文庫本系統諸本の各本文について精査したものは見当たらないので、本稿では穂久邇文庫本系統の完本四本の本文異同を検討し、各本文の特徴を探る。その際各本の位置づけを明確にするために、前田家本および「前田家本系とも穂久邇文庫本系とも定めがたく、両者の混合本文を持つと思われる混態本文」<sup>4</sup>を有するとされる西園寺文庫本とも比較することとする。

## 二、穂久邇文庫本の完本

まず、今回取り上げる諸本の外題と冊数、その略称を示す。本稿では略称を用いる。なお、①穂久邇文庫本は翻刻、②龍門文庫本・⑤西園寺文庫本はインターネット上の画像、⑥前田家本は複製に拠っている。

### 【穂久邇文庫本系統の完本】

①穂久邇文庫蔵本「莓衣物語」(四卷四冊(一〜四)、

(二)

穂久邇文庫本)

②黒川文庫蔵四冊本「こけの衣」(四卷四冊(一〜四)、黒川四冊本)

③盛岡市中央公民館蔵本「こけの衣」(四卷四冊(春〜冬)、盛岡本)

④龍門文庫蔵本「苔の衣」(四卷三冊(上中下)(上巻が巻一・二に相当)<sup>5</sup>、龍門文庫本)

### 【系統不明の本】

⑤西園寺文庫蔵本「こけ衣」(一冊(巻三・四相当)、西園寺文庫本)

### 【前田家尊経閣本】

⑥前田家尊経閣本「こけ衣」(四卷四冊(春〜冬)、前田家本)

次に、諸本の簡単な書誌情報を示す。

①穂久邇文庫本は、久曾神昇氏の古典文庫解題によると、「縦一尺五厘(稿者注約三〇・五cm)×横七寸一分五厘(同約二一・七cm)。袋綴。表紙は雲紙で、上下の両端に藍及び紫の波雲があり、左上に鳥子紙の題簽を貼る。料

紙は簾目のある上質打紙。一面一二行。室町時代中期永正頃の書写と推定して大過は無からう」とある。「少しく墨筆で訂正した他に、全四冊にわたつて朱筆校合がある」とあり、その校合は前田家本系統に比較的近いとしている。朱筆が本文と同筆か別筆かについては言及がない。

②黒川四冊本は、縦二六・〇cm×横一九・五cm。袋綴。楮紙。『黒川文庫目録 実践女子大学図書館所蔵』によれば、「表紙は第一・二冊は打曇に唐獅子・石橋文、「石橋」の散らし文字。第三冊は打曇に千鳥・若松文様。第四冊は打曇に菊花・桜花並び文様。表紙中央に金銀箔散らし題簽（一三・六×三・一cm）。「異本」と朱書する。各冊一丁表右下に「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」「黒川／真頼（丸印）」朱印。第四冊裏表紙見返し左下に「筒井藏書」朱印。一面一〇行。墨付は各五二・四八・五九・七〇丁。朱筆の書入僅かにあり、墨筆の書入多し。ほとんどは本文の修正。また小紙片を本文の脇に貼付して修正箇所を示す。なお第四冊は、桐花・蔦文様であろう。

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長の佐々木孝浩氏の

ご教示によれば、本文筆跡は近世初期ではないかとのことである。また、この表紙は一七世紀の一時期にのみ流行ったものであり、打曇の表紙のうえに、型抜きした紙を載せて、上から藍色で染めるものである旨<sup>⑦</sup>ご教示いただいた。

なお横井孝氏は、黒川四冊本について「該本には墨によるミセケチ・修正箇所が二〇〇足らずと少なくない由に触れたが、それらを概観するに、異本の校合というよりも誤写の修正であることは、小紙片が示している<sup>⑧</sup>」と述べており、首肯できる見解である。

③盛岡公民館本は、縦二九・〇cm×横二一・三cm。楮紙。紺色に金の雲英引。見返しは、金粉金箔散らし、草花模様。題簽は表紙中央上部に金粉金箔散らしで「こけの衣春（夏／冬）」ところどころ補入、異本注記あり。近世前期の書写か。一面一〇行。

④龍門文庫本は、龍門文庫HPに掲載されている奈良女子大学作成の書誌情報によれば、「縦二八・三cm×横二一・五cm。袋綴。楮紙。川瀬一馬氏によれば寛永頃の写本<sup>⑨</sup>」。上巻は他本の巻一・二巻を併せて上巻一卷にまと

めている。表紙は藍色、雷文つなぎ文。左上部に金箔散らし題簽を貼る。一面一行。

⑤西園寺文庫本は、立命館大学アトリサーチセンター・古典籍ポータルデータベースの詳細書誌情報<sup>10</sup>によると、「表紙(縦二七・五cm×二〇・五cm)は雲紙、外題は、表紙左に「古計衣」。書写者・書写年代未詳。全一二三丁、本文一二行、墨による書入れあり」とある。なお、八五丁(巻四に相当)からの一丁に錯簡を有する。

⑥前田家本は、複製解題<sup>11</sup>によると、「縦七寸七分五厘、横五寸五分の胡蝶装四冊本で、料紙は楮紙、金欄裂地の中央に、朱地金泥雲形の模様ある題簽を推し、これに「こけ衣」各冊それぞれ春、夏、秋、冬と記す。著者はほぼ寛永延宝の頃の公卿の筆に成るものと思はれるがその何人たるかは不詳である。伝来事情その他も亦一切不明である」。一面一〇行。

以下、各本の特徴を順に分析していく。例を示すにあたっての方針を列挙する。

・例に示す本文はいずれも一続きの場面を示している

(四)

が、黒川四冊本の改行によって区切りを設け、場合によって前後に黒川四冊本の本文を( )内に示した。

・「」は改行位置を示す。

・【例二】巻一・二才のように、例番号の下に黒川四冊本の丁数を示す。

・以下に、今後対校表で用いる各テキストの略号を示す。

穂Ⅱ①穂久邇文庫本、黒Ⅱ②黒川四冊本、龍Ⅱ③龍門分庫本、盛Ⅱ④盛岡本、西Ⅱ⑤西園寺文庫本、前Ⅱ⑥前田家本。

・注目すべき脱文・本文異同にそれぞれ網掛・波線を付した。

・穂久邇文庫本本文は古典文庫に拠り、濁点、句読点を排した。

### 三、穂久邇文庫本

完本四本の本文を比較すると、基本的にはそこまで大きな異同は見受けられないものの、解釈に関わる異同は少なくない。本稿ではまず穂久邇文庫本の特徴を探る。

穂久邇文庫本は書写年代が最も古いとされるが、麻原氏の指摘の通り、誤脱と見られる箇所が散見する。明らかに脱落とみられる例を示す。

【例二】卷四・一三ウ

（御せうそくはかりたてまつり給ふもいと、むねいたく御心はみたれ」まさり給ふかはかりうとくしくなんとはいつかたにつけてももて」なしきこえたまふましけれとおりにつけてはしのひかた」かりし御けしきの心うさをおほしいつれはさはかりふるめか」

前 しき御こゝろにもしこゝろえたまふこともやとつ、  
ましくて

西 しき御心 にもしこゝろへ給 ふこともやとつ、  
ましくて

黒 しき御心 にもし心 へ給 ふ事 もやとつ、  
ましくてかやう」

穂 しき御心 にもし 給 ふ事

龍 しき御心 にもし心 へ給 ふ事 もやとつ、  
ましくてかやう

前 すき給 ふなるへししも月 朔日ころは兵

部卿 過 給 ふなるへししも月 朔日比 は兵

黒 にて過 たまふなるへし霜 月の朔日ころはひやう  
ふきやう」

穂 霜 月の一日比 はひやう

龍 にて過 給 ふなるへし霜 月の朔日比 は兵

部卿 盛 にて過 たまふなるへし霜 月の朔日ころはひやう  
ふ卿

兵部卿宮は春宮女御に横恋慕しており、春宮女御に一目会いたいと春宮の御所に頻繁に訪れるが、春宮女御には会えない。女御の様子を思い出すと共に、女御に対する自身の恋が春宮に露顕することを恐れて日々を過ごすという文脈であり、そこから十一月一日まで時間が経過している。穂久邇文庫本の「春宮の」古めかしき御心にもし給ふこと、霜月の一日比」では明らかに意味が通じ

ない。したがってここは穂久邇文庫本の脱落であると考  
えられる。

次の例は、最愛の女君を亡くした苔衣大將が、その五  
七日の法要の際に涙を流して悲しむ場面である。

【例二】卷三・三十一才

(ねん) ふつのゑかうはかはかりものをもはさらむひと  
たにも物)

西 心ほそかりぬへししやうれ うけち定わうしやう極  
楽と

黒 心ほそかりぬへししやうりやうけち定往 生 極  
楽と

穂 心ほそかりぬへししやう けち  
と

龍 心ほそかりぬへししやうりやうけち定往 生 極  
楽と

(いふわたりをき、給ふにはおとなしのたきもせきかね  
たる御けしきも)

穂久邇文庫本以外は、すべて「聖靈決定往生極楽」と  
解し得る。時代は少し下るが、『源平盛衰記』巻八の「讃

(六)

岐院事」にも、西行が崇徳院の流された跡を訪れた場面  
で「読経念仏シテ聖靈決定往生極楽ト回向シ奉テ立ケル」  
という表現が用いられており、「聖靈決定往生極楽」は供  
養を行うときの定型句のようになっていたと考えられ  
る。「しやうけち」は無理に意味を探すと「正結」(煩惱  
の本体)と解することもできるが、この語が供養するとき  
の定型句として出てくる例は管見に入らず、穂久邇文庫  
本の本文が脱落していると考えるのが自然である。もう  
一つ例を挙げる。

【例三】卷四・三七ウ

(よひのまになかれはてなはあすか川あすのあふせを」  
たれかまつへきとかきていたしつみやはじめもおよはぬも  
し)

西 やうなとにこそあらね なつかしうあはれなるさま  
にた、うち

黒 やうなとにこそあらねとなつかしうあはれなるさま  
にた、うち

穂 やうなとにこそあらねとなつかしうあはれなるさま  
にた、うち

龍 やうなどにこそあらねとなつかしうあはれなるさま  
にたゝうち

盛 やうなどにこそあらねとなつかしうあはれなるさま  
にたゝうち

西 思 ひける事 をみたれかきたりけるとみゆるふて  
のなかれなとを

黒 おもひけることをみたれかきたりけるにみゆる筆  
のなかれなとを

穂  みゆる筆  
のなかれなとを

龍 おもひけることをみたれかきたりけるとみゆる筆  
のなかれなとを

盛 おもひけることをみたれかきたりけるとみゆる筆  
のなかれなとを

（かきつらんすかたも見給ふ心ちしてあわれにおはさる<sup>(13)</sup>）

兵部卿宮が、愛人である双子姉君からの返歌を見る場面である。穂久邇文庫本以外は、「（文は）慕わしくしみにみとした様子であり、思ったことを乱れ書いたと見え

る筆の流れなどを、双子姉君が書いたであろう姿もご覧になる心地がして」と解される。一方、穂久邇文庫本は「慕わしくしみにみとした様子が見える筆の流れなどを、双子姉君が書いたであろう姿もご覧になる心地がして」となる。『源氏物語』では「あはれなるさま」に「常に聞こえ給ふ」（若菜上）、「御消息ばかりあはれなるさまにてたびたび通ふ」（賢木）といった表現はあるが、他の物語も含めて筆跡に対して「あはれなるさま」が見えると形容する例は見られず、「あはれなるさま見ゆる筆の流れ」という表現はやや不自然である。前田家本系統諸本を含めた諸本もすべて「にたゝうちおもひけることをみたれかきたりけるに」という本文を持つことと併せて考えると、穂久邇文庫本が前田家本を含めたすべての原形である可能性も否定できないが、穂久邇文庫本の脱落であると考えの方が自然であろう。

このように、完本および西園寺文庫本・前田家本と比較したときに、これまで挙げた例を除く見かけ上の穂久邇文庫本の脱落は、巻四で四箇所ある<sup>(14)</sup>。これらはいずれも、穂久邇文庫本の脱落が否か判断し難い。つまり穂久



邇文庫本は、脱落を数箇所持つか、あるいは前田家本系統も含めて最も原形に近い本文であると考えられる。

次に、穂久邇文庫本の誤りだと考えられる例をいくつか示す。

【例四】卷一・一一ウ

(その程右大將はかなくわつらひたまひてうせ給ぬれば)

前 左大將内大臣かけ給こん大なこん右大將 になり

たまふいつしか

黒 左大將内大臣かけ給えん 大納言 右大將 に成

給 ふいつしか

穂 左大將内大臣かけ給ふ 権 大納言 右大將内大臣にかけなり

給 ふいつしか

龍 左大將内大臣かけ給権 大納言 右大將 になり

たまふいつしか

盛 左大將内大臣かけ給 大納言 右大將 に成

たまふいつしか

右大將が亡くなる。この右大將は内大臣を兼務してい

たのか定かではないが、その結果穂久邇文庫本以外では、

源氏の兄弟のうち、左大將(兄)が内大臣を兼務し、権

(八)

大納言(弟)が右大將になる。穂久邇文庫本だと大納言(弟)が右大將になり、かつ内大臣を兼務する。つまり、左大將はそのままであり、兄が弟に大臣昇進を越されるというねじれが生じる。

ところが、このあと左大將は「内大臣」として登場し、左大將は以降「おとど」と呼称されるので、ここで「内大臣かけ」という記述は必要である。権大納言も以後「右大將」と呼称されるものの、兄の内大臣の死後に内大臣に昇進することが本文で明言されており、ここで内大臣になったわけではないことがわかる。つまり、穂久邇文庫本は明らかに誤りである。穂久邇文庫本は、目移りもしくは誤読によってこの本文となったと推測される。

【例五】卷四・九オ・ウ

前 けなり大 みやおと、なともまいりて みたせまつ

り給ふに さきの

西 けなり大 みや なともまいりつ、見奉

り給ふに さきの

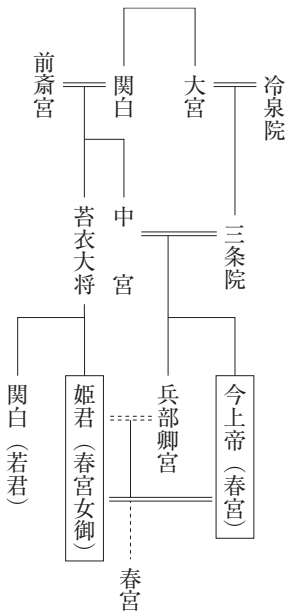
黒 けなり大 みやうは宮なともまいり みたてまつ

り給ふに 先

|                    |                    |                   |                   |                |                |              |              |              |
|--------------------|--------------------|-------------------|-------------------|----------------|----------------|--------------|--------------|--------------|
| 盛                  | 龍                  | 穂                 | 黒                 | 西              | 前              | 盛            | 龍            | 穂            |
| あへ給は               | 大將 殿               | 大納言 殿             | 大將 殿              | 大將 との御事        | 大將 との御こと       | けなり大         | けなり大         | けなり大         |
| 御ことをおほし出られてこといみもゑし | 御ことをおほし出られてこといみもゑし | 御ことを覚し出られてこといみもゑし | 御ことをはしかられてこといみもゑし | おほし出られてこといみもゑし | おほし出られてこといみもゑし | り給ふにも先       | り給ふにも先       | り給ふに         |
|                    |                    |                   |                   |                |                | みやうは宮なともまいりて | みやうは宮なともまいりて | みやうは宮なともまいりて |
|                    |                    |                   |                   |                |                | 見たてまつ        | 見たてまつ        | 見たてまつ        |
|                    |                    |                   |                   |                |                | 見奉           | 見奉           | 見奉           |

（すかはかりのほたしともおふりすて、おもひ取たまひけん）

中宮（姫君の伯母）に引き取られた姫君が裳着を行うにつけても、「大宮うば宮」もしくは「大宮」、もしくは「大宮おとゞ」が、姫君の実父でありながら出家遁世した苔衣大將を思い出して涙を浮かべるといふ場面である（系図一参照）。ここはいずれを主体としても不自然さを免れないので、涙を浮かべたのが誰かについては今は措き、苔衣大將の呼称として「大將」、「大納言」のいずれが自然な本文か検討する。



【系図一】

苔衣大将が、巻四においてこれ以前も以後も家族から「大将」と呼称されていることからすると、「大将」が自然な本文であり、穂久邇文庫本は読解上混乱を召さかねない本文であると考えられる。穂久邇文庫本は、「先」という「こん」と紛らわしい漢字を「こん」と読んだため、その直後を「こん」に続いて不自然でない「大納言」へと変更したのではないだろうか。なお、前田家本・西園寺文庫本は「さきの」となっており、そう読んで間違っているのではないが、「たゝこの大将殿の姫君をそまことのいもせのやうにおもひかわし給ひたる」(六才)のように、巻四では苔衣大将のことが思い出される際にはすべて「大将」とのみ呼ばれていることから、「先(まづ)」が統一を取る意味では自然である。

続いて同じく巻四の、苔衣大将と彼を導く「阿私仙」の系譜を明らかにする場面を取り上げる。

【例六】巻四・五ウ

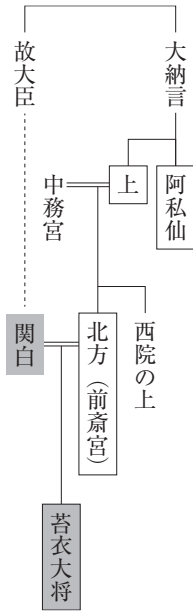
前 たまふ此 あしせんはは、うへの御はら<sup>16)</sup> にな  
つかさのみや  
西 給 ふこのあしせんはは、うへの御はら<sup>17)</sup> になか

|          |          |          |          |                |                    |                    |                        |                    |
|----------|----------|----------|----------|----------------|--------------------|--------------------|------------------------|--------------------|
| 龍        | 穂        | 黒        | 西        | 前              | 盛                  | 龍                  | 穂                      | 黒                  |
| のうへにて物し給 | のうへにて物し給 | のうへにて物し給 | のうへにて物し給 | のうへにて物したまひし人は古 | たまふ此 あしせんはは、うへの御はら | たまふ此 あしせんはは、うへの御はら | 給 ふ此 あしせんはは、うへの御はらからに中 | たまふ此 あしせんはは、うへの御はら |
| ひし人は此    | ひし人はこの   | ひし人は此    | ひし人はいにしへ | おとゝのあに         | つかさのみや             | つかさのみや             | つかたの宮                  | つかさのみや             |
| おとゝのあに   | おとゝのあに   | おとゝのあに   | おとゝのあに   | おとゝのあに         | つかさのみや             | つかさのみや             | つかたの宮                  | つかさのみや             |

## のそつの大納言

（にてうせ給ひし人の御むすめそかし彼御せうにて）

これは「阿私仙」の系譜を解き明かす重要な一文である。以前拙稿で指摘したが、阿私仙は苔衣大将から見て、母の母の兄に当たる人物であり、黒川四冊本の本文のみ意味が通じる。「御は、」の部分「御はら」では、苔衣大将の母は苔衣大将を生むより以前に「阿私仙」を出産し、その後には再婚していることになるものの、そのような記述は一切見られず、子にあたる聖が「年六十ばかり」であることも矛盾する。「御は、」の部分「御はらから」だと、中務宮の娘は二人であるのに、別の娘がいることになってしまう。「は、」と「はら」は誤りやすいにしても、本文「はらから」は、穂久邇文庫本もしくはそ



【系図二】

の祖本の読解による独自の訂正の可能性が高いだろう。

なお、完本四本の「この」は誤りであり、西園寺文庫本「いにしへ」もおかしい。「古（こ）」は「故」でないかと考えられるが、『苔の衣』が両系統に分かれる以前からの混乱であろう。穂久邇文庫本の誤りと考えられる例をもう一つ示す。

## 【例七】 卷二・二五オ

（とのうへはあらぬものなどをゑたらんやうにうれしく）  
今一しほいたはしくおほえ給いひてもく内のおと、の御心」

黒 のありかたさをいかてかくまてはと見給 にもおろ  
かならず」

穂 のありかたさをいかてかくまてわと見給 にもおろ  
か

龍 のありかたさをいかてかくまてわと見給 にもおろ  
かに

盛 のありかたさをいかてかくまてはと見給ふにもおろ  
かに

（おほししられ給）

関白とその北の方は、姫君との結婚が決まったおかげで息子が重態から回復したのが奇跡的で嬉しく、彼をいっそう大切に思う。それにつけても、姫君との結婚を認めてくれたその父内大臣の心のありがたさを、並一通りでなく思うという場面である。配慮のありがたさを「おろか」(冷淡)に思うのでは明らかにおかしい。穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本は本文の読解上誤りである。

また、穂久邇文庫本のみ、校異もまま見受けられる。<sup>(18)</sup>

【例八】巻三・五四才

(いみしからむきうらきむしうにもこけの衣いはの枕はこよ)なくかへまさりにはんへりぬへければなつみ、<sup>(19)</sup>つゝみても)

|   |         |           |                 |
|---|---------|-----------|-----------------|
| 前 | か       | の世界       | へまいりはんへらむこそとしころ |
|   | のねかひにて侍 | らめとて      |                 |
| 西 | か       | ひせかいへまいり侍 | らんこそとしころ        |
|   | のねかひにて侍 | らめとて      |                 |
| 黒 | か       | のせかいへまいり侍 | らんこそとしころ        |
|   | のねかひにて侍 | らめとて      |                 |

(一一)

穂 だのしみのせかいへまいり侍 らんこそとし比

のねかひにてはんへらめとて

龍 か ひせかいへまいり侍 らんこそとしころ

のねかひにて侍 らめとて

(いとくちおしとおほしたる御けしきはいひしらすめてたく)

昔衣大將が出家して修行したいと主張する場面である。煩惱から離れる修行を「たのしみ」と描写するのは疑問であり、また他の用例も見受けられない。また「たのしみの」から「かの／かひ」という本文には変化しづらいのではないだろうか。

このように全巻を通じて、穂久邇文庫本の誤脱と考えられる例は散見する。したがって書写年代が古いと見なされるからといって、穂久邇文庫本のみを全面的に信頼して、穂久邇文庫本系統諸本の代表本文として取り扱うのは危険であると言えよう。

そこで注目されるのが、黒川四冊本・龍門文庫本の存在である。龍門文庫本・盛岡本、黒川四冊本の順に特徴を分析する。

#### 四、龍門文庫本・盛岡本

完本四本の本文を並べると、一見して龍門文庫本・盛岡本がよく似ていることが看取できる。表記以外の三字以上の異同（脱落を除く）は、たとえば巻一では二箇所のみであり、用字もよく似ている。この傾向は全巻同様である。また巻三では、龍門文庫本・盛岡本のみ「うへをさし人はなくともひめこ松いまは雲井におひのほらん」という和歌が本文文化している。加えて龍門文庫本・盛岡本には、本文の脱落が共通する箇所が散見する。具体例を示す。

##### 【例九】巻一・四七ウ

黒 ぬありさまなりこれやそちの宮のうへならんとそをし

穂 ぬありさまなりこれやそちの宮のうへならんとそをし

龍 ぬ有 さまなりこれやそちの宮

盛 ぬありさまなりこれやそちの宮

黒 はかりきこえたまふもしろく宮なんかへられたま<sup>せ</sup>う  
穂 はかりきこえ給 ふもしろく宮なんかへらせ給 ふ  
龍 なんかへらせたまふ  
盛 なんかへらせたまふ  
（とく御かたへいらせ給へとうへなん申させ給ふとおくのかた）より人きていへは）

苔衣大將が女君たちを垣間見して、「これが帥宮の上であろうか」と推測しているところに、ちょうど帥宮が帰ってきた、という場面である。龍門文庫本・盛岡本だと「これが帥宮がお帰りになる」と不自然な本文となってしまうことから、これは龍門文庫本・盛岡本共通の脱落だと考えられる。同様の例を示す。

##### 【例一〇】巻三・五八ウ

（をなしいもせといひなから）

前 かきりなく思 ひかはしたまへる御中なれはけにい  
かてをろか

黒 かきりなくおもひかはしたまへる御中なれはけにい

かてかおろか」

穂 かきりなくおもひかはしたまへる御中なれはけにい

かてかおろか

龍 かきり

盛 かきり

■

前 におほされんひめきみはかやうのことをきゝたまふ

にはゝうへの

黒 におほされんひめ君 はかやうの事 をきゝ給ふ

にはゝうへの

穂 におほされんひめ君 はかやうの事 をきゝ給ふ

にはゝうへの

龍 におほされんひめ君 はかやうの事 をきゝたまふ

にはゝうへの

盛 におほされんひめ君 はかやうの事 をきゝ給ふ

にはゝうへの

(おりはさすかに未おさなくてはかゝしうおほしわき

たること」

前 もなかりしにこれはいと あはれにわかゆくすゑ

ものはかなく

穂 もなかりしにこれはいと あわれに我 ゆくすゑ

ものはかなく

黒 もなかりしに是 はいと あはれにわかゆくすへ

ものはかなく

龍 もなかりしに是 はいま あはれにわかゆくすゑ

ものはかなく

盛 もなかりしに是 はいかさまあはれにわかゆくすゑ

ものはかなく

姉弟仲がよかったために、中宮(苔衣大将の姉)が、弟苔衣大将の出家遁世にいつそう衝撃を受けるという場面である。龍門文庫本・盛岡本の本文だと「妹背と言ひながら、限り、姫君は」と続いて、これでは文意が通らない。

このように、龍門文庫本・盛岡本は脱落が共通する傾向があり、これは全巻通じて変わらない。<sup>(20)</sup> そのほか、諸本間で本文が対立するとき、ほとんどの場合龍門文庫

本・盛岡本の本文は一致する。<sup>(21)</sup>一例を示す。

【例一二】巻四・一〇ウ

（ひめ君の御まいりもちかくなるまゝにいかにせましと御心もうき）

前たちておほさるれと何のかひもなしひまゝには

この世

西立ておほさ〇れと何のかひもなしひまゝには

此世

黒立ておほさるれとなにのかひもなしひまゝには

この世

穂たちておほさるれと何のかひもなしひまゝをま

かせて此世

龍立ておほさるれとなにのかひもなしひまゝをう

かゝふて此世

盛立ておほさるれとなにのかひもなしひまゝをう

かゝふて此世

（後の世いみじきことはをつくしてなきかなしみたまへと）

前なにのしるしかあらん

さりとてはゆるき

なくさたまりたること

西何のしるしかあらん

さりとて

ゆるき

なくさたまりたること

黒何のしるしかあらん

さりとて

ゆるき

なくさたまりたる事

穂なにのしるしかあらんいまはいかなりとてもゆるき

なくさたまりたること

龍何のしるしか候らん今はいかなりとて

さりとて

ゆる

きなくさたまりたること

盛何のしるしか候らん今はいかなりとて

さりとて

ゆる

きなくさたまりたること

（ゆへにひたふるならん心つかひもまことに人の御ため  
もととをしかりぬへくさはかりうるはしきとうくうの  
御心にひんなき）

大別するとここでは、前田家本・西園寺文庫本・黒川

四冊本に対して、穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本が

対立し、さらにその中でも穂久邇文庫本と、龍門文庫本・

盛岡本が対立する。この場面は兵部卿宮が、恋慕する姫

君の春宮入内を目前に泣き悲しむところであり、龍門文



庫本・盛岡本では「隙を窺つて、姫君に思いを訴えた」ということがより強調されている。また、作中では「侍り」が主に用いられていることに加え、ここは会話文でもないので盛岡本の「候らん」は明らかに不自然である。

脱落・異同の状況からすると、龍門文庫本・盛岡本は酷似した本文を持ち、共通する祖本を持つ可能性も高い。なお両者を比較すると、盛岡本が龍門文庫本の一行分ないしそれ以上に相当する分量の脱落を見せるのは、春卷二箇所、夏卷五箇所、秋卷四箇所（和歌一首の四句分を含む）、冬卷三箇所あり、その逆はないことから、盛岡本の本文は相対的に龍門文庫本の下位に位置づけられよう。

龍門文庫本・盛岡本の特徴として、脱落は他二本に比較して多い一方、独自異文が最も少ないことが挙げられる。ただし龍門文庫本・盛岡本が、他本と対立する本文を持つ箇所も数箇所あるので例を挙げる。

【例一二 卷一・五ウ】

（うれしとおほす事かきりなしましたしきに御いのりとも）

（一六）

前 おほしおきつかやうなるを大将 とのにもりき、  
給 てまた

黒 おほしおきつかやうなるを大将 殿 にもりき、  
給ひてまた

穂 おほしおきつかやうなるを大将 とのにもり聞  
てまた

龍 おほしおきつかやうなるを大納言 殿 にもりき、  
てまた

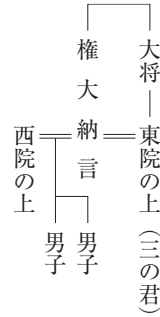
盛 おほしをきつかやうなるを大納言 殿 にもりき、  
てまた

（いかなる御心ちにとうらやましくおほすものから）

権大納言には東院の上（大将の三の君）、西院の上という二人の北の方がいた。東院の上（大将の三の君）には子が生まれないのに対し、西院の上には男子が二人生まれた。西院の上がまたも懐妊したことを耳にした東院の上の周辺（＝大将方）は、うらやましく思うという場面である（系図三参照）。したがって本文は「大納言」でなく、「大将」が本来適当である。龍門文庫本・盛岡本には書写上、もしくは本文解釈の段階で誤りがあったと考え

られる。

【系図三】



【例一三】卷二・二六才

（左のおと、にひわ内のお）

前 と、の中將 ふえこん大納言さうのことわざとな  
らすおき

黒 と、の中將 にふえ権 大納言さうのことわざとな  
らすおき

穂 と、の中將 にふへこん大納言さうのことわざとな  
らすおき

龍 と、の中納言にふえ権 大納言さうのことわざとな  
らすおき

盛 と、の中納言にふえ権 大納言さうのことわざとな  
らすおき

（わたしたるを中納言のふえたひく御きそくあれと）

この数丁前に、内大臣の息子は「宰相中將」と呼ばれている。諸本異同はない。その後昇進した記事もないので、内大臣の息子は「中將」が本来正しく、龍門文庫本・盛岡本の「中納言」は内容からすると誤りである。内大臣の息子が笛に巧みな「中將」の前に笛が置かれていたという本文の直後に、帝が「中納言」の笛を所望したという文があるため、龍門文庫本・盛岡本は解釈で混乱したのだろう。

【例一四】卷二・六才

（かみのか、りかんさしおもやうなと見てもくあく世ある）

前 ましかりけりと み給 あに君 よりは

つねにたいめんなども

黒 ましく 見給 にあに君 より

つねにたいめんなども

穂 ましく見えたまふをかう見給 にあに君 より

つねにたいめんなども

龍 ましく たしをかう見給 ふにあに君 より

つねにたいめんなども

盛 ましく たしをかう見たまふにあにきみより」

つねにたいめんなども

(なければにやいとつ、ましけにてきちやうにまされつ、)

帝の手紙を携えてやってきた次兄が、姫君を眺めている場面である。次兄は美しい妹をただ見ても飽き足りないが、姫君にとって次兄は長兄よりも対面する機会の少ない相手なので、見られることに気が引けて几帳に隠れがちである。

穂久邇文庫本は、冗長であるが一応意味が通る。それに対して龍門文庫本・盛岡本では文意が通らない。しかし、穂久邇文庫本と龍門文庫本・盛岡本は並べてみると「たしをかう」が一致し、祖本をたどると、穂久邇文庫本と共通の本文があったのではないかと推測される。

# 【例一五】 卷二・二才

(心ならずをこたりにけるたえ)まのひさしさを<sup>そ</sup>よちなけきつ、うれへ給ふいみし」く心ふかけなり宮もはしちかくうち出給ひて月」御らんする程なりければしのひてまいり給たるに」

(一八)

前 つきせすつ、ましけなる御けしきはれのいひしら

す

黒 つきせすつ、ましけなる御けしきはれのいひしら

す

穂 つきせすつ、ましけなる御けしきはれのいひしら

す

盛 つきせす心くましけなる御けしきはれのいひしら

す

龍 つきせす心くましけなる御けしきはれのいひしら

す

(めてたきになに事もかやうにものし給は、しもいかはかりかとおほす)

苔衣大将が朱雀院の女三宮を訪れる場面である。女三宮の様子「つつましげ」(気恥ずかしそうである)、か「心くるしげ」(いじらしい、いたわしい)か、いずれでも意味は通じる。この後に「つつましげにうち笑ひて」とあることからすると、「つつましげ」が自然であろうか。親本が「心くるしげ」であればそのまま写せばよいにもかかわらず、龍門文庫本が「心くましけ」という本文

を持つことからすると、親本は「心くるしけ」とは読みにくかったと推測される。踊り字「ゝ」とひらがな「く」は非常に誤読しやすい文字であり、「心」と「つ」もくずし方によっては誤りやすいことからすると、龍門文庫本「心くましけ」は「つゝましけ」と共通祖本を持つと見てよいだろう。盛岡本は、「心くましけ」とある龍門文庫本のような本文を意味が通じるように「心くるしけ」に改めたのではないかと考えられる。このような例は例一〇波線部など他にも散見し、盛岡本はやはり龍門文庫本よりも下位に位置づけられると考えられる。

麻原氏が指摘する通り、龍門文庫本は穂久邇文庫本の誤脱を補う。ただし諸本を比較すると、龍門文庫本・盛岡本が他の完本と対立する場合、龍門文庫本が解釈上正しく、他本が誤りであると判断できる例はほとんどない。龍門文庫本はあくまで、穂久邇文庫本・黒川四冊本の誤脱を補うものとして注目すべきであろう。

ここにおいて、これまでの例において解釈できない「誤り」をほとんど持たない黒川四冊本が注目される。

## 五、黒川四冊本

黒川四冊本には、穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本には散見する脱落部分がない。<sup>22</sup>そのかわり、卷三に以下の衍字がある。

まにおもひつゝ、けたまふにいとむつかしくむねいたく御いらへもせられたまはぬをことわりにいみし宮成とも」むねいたく御いらへもせられたまはぬをことわりにいみし宮成とも」誠にあの有さまにゑまさり給はしと。：。（七ウ）

傍線部が重複している。これまで取り上げた用例において黒川四冊本はしばしば、本文解釈上最も「そうあるべき」本文を有する傾向があった（例六・七・九等）。それが顕著な例は他にもある。なお、以下盛岡本は龍門文庫本と異なる本文を持つ場合のみ取り上げる。

### 【例一六】卷一・一オ

（権大納言ときこゆるはこせんていの御おとうと一世の）

前けんしときこえし二郎たいしやうの御おとゝそ

かし人

黒源氏ときこへし二らう大しやうの御おと、そ

かし人

穂源氏ときこえし二郎たうたいの御おとうとそ

かし人

龍源氏ときこえし二郎たうたいの御をと、そ

かし人

権大納言は、前田家本にもある通り、故先帝の弟である「一世源氏」の次男であり、「大将」の弟である（系図四参照）。黒川四冊本以外の穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本の本文では、権大納言は「一世源氏」の次男で、当帝の弟であるとなっている。一世源氏が皇籍復帰して、それに伴いその子も皇籍復帰した例は、宇多天皇等の例があるが、この箇所では一世源氏の息子が「当帝」である可能性はない。この直後に、いずれの本にも次のようにあるからである。

さまなともゆへくしくおわすれはよの人もあるに君  
の「大将よりは今すこし思ひましきこえたり（一才）。

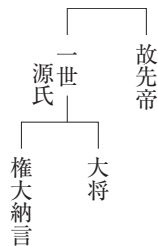
これによって、権大納言が「大将」の弟であることが確

定する。したがって「たう

たい」は明らかな誤りであ

り、解釈上は黒川四冊本・

前田家本の本文が正しい。



【例一七】巻二・四一才

前はしつかた きちやうひきよせて なみゐたる女は  
うとも

黒はしつかたにきちや〇ひきへたて、なみゐたる女は  
うとも

穂はしつかたにきちやう引へたて、いたる女は  
うとも

龍はしつかたにきちやうひきへたて、なみゐたる女房  
とも

前み給に大納言いりたまへは いとはつかし  
とおほひ

黒見給ふに大納言いり給へはつきせすいとはつかし

とおほし

穂

見給ふに中納言<sup>大</sup>いり給 えはつきせすいとはつかし  
と覚 し

龍

見給ふに中納言いり給 へはつきせすいとはつかし  
とおほし

（いりたまへるまみななどのにはやかにあいきやうつきたる物）

この直前に「ちもくにもなりぬれは中納言かすより外の大納言になり給ひぬ」とあるので、大納言となつてゐる黒川四冊本が読解上正しい。

『苔の衣』の系譜や官位については、これまで見てきた通り諸本間の本文異同も著しい。この点について稿者は以前、官職の異動や血縁関係を説明しようという姿勢が『苔の衣』には見られず、順を追って本文を読んだ場合読み解くのが困難であるために生じると指摘した。<sup>(23)</sup>

ところが黒川四冊本には、系譜・官職に関して、読解する上で誤りと判断できる箇所がほとんど見受けられず、明らかな例外は、例六の一部と次の例のみである。主な官職異動表と共に示す。

【例一八】巻三・四才

（誠や左のおとゝの）

西 御いみもはてにしかは左大将内大臣 にのほり給

ひ

黒 御いみもはてにしかは左大将内大しんに上 りたま

ひ

穂 御いみもはてにしかは左大将内大臣 にあかりたま

ひ

龍 御いみもはてにしかは左大将内大臣 にのほりたま

ひ

西 にしそかしおなしおり  右大将に

くはんはく殿

黒 にしそかしおなしをり右のおとゝのあにの右大将に

関 白 殿

穂 しそかし をり右のおとゝのあにの右大将に

くわんはく

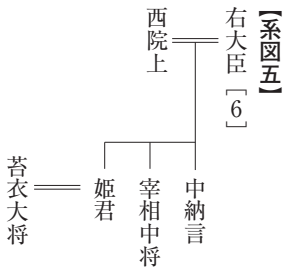
龍 しそかしおなしおり右のおとゝのあにの右大将に

関 白 殿

(の大納言殿成たまひにき)

表一<sup>24</sup>の左大臣「3」が死去、その忌みが明けて、左大将「7」が内大臣になった。同時に、苔衣大将(当時大納言)が右大将になったという内容である(系図五及び表一参照)。穂久邇文庫本系統の四本は、「同じ折、右大臣の兄の右大将に関白殿の大納言殿なり給ひにき」となっているが、右大臣の兄は「右大将」ではない(故内大臣である)のでこの本文は読解する上では矛盾している。

ただし『苔の衣』の官職は、説明の不親切さに反して驚く程しつかり設定されていることは注意すべきであろう。表一を見てもわかるように、内大臣「7」が左大将



表一(官職異動)

| 巻    | 事項       |     |      |      |     |
|------|----------|-----|------|------|-----|
| 巻二   | 左大臣死去    | 関白  | 左大臣  | 右大臣  | 内大臣 |
| 巻三   | 左大臣の忌明   | [1] | ▲[3] | [8]  | [6] |
| 巻三   | 右大臣「6」死去 | [1] | [8]  | ▲[6] | [7] |
| 巻三   | 苔衣大将出家   | [1] | [8]  | [7]  | ◇   |
| 巻四   | 兵部卿官元服後  | [1] | [8]  | [7]  | ◇   |
| 数年経過 |          |     |      |      |     |
| 若君   | 苔衣大将の    |     |      |      |     |

・人物が没したときは▲で示した。  
・存在が想定しうる人物を◇で示した。  
・判別のため主な人物に「」で番号を振る。

を兼任していなければ誰が左大将であったかは不明であり、ここに物語にはほぼ登場しない人物(◇)が割り当てられている可能性もある。「あが」という表現が普通兼官を指さないことからすると、穂久邇文庫本系統は、元々は「右大臣の兄」の下に何か本文があった可能性、たとえば右大臣の兄の息子(権大納言)、もしくは右大臣の子の兄が左大将になった、ということを示す本文があった可能性も捨てきれない。

次に、明らかな誤りとまでは言えないが黒川四冊本本

文がやや不審な例を示す。

【例一九】巻四・七才

（きこえ出ていとおもわすに心うしとおもひうとまれん  
こそ）

前 あやなかるへ けれなと人しれすなかめかち なる

西 あやなかるへ けれ と人しれすなかめかちになる

黒 あやなかるへ けれなと人しれす詠 かちにあん  
せられた」

穂 あやなかるへしけれなと なかめかちにあん  
せられ給

龍 あやなかるへ けれなと なかめかちにあん  
せられた

前 をはしり給はすは、みやなとはとうくうの右の

おと、の女御

西 をはしり給はすは、宮 などは春 宮 の右の

おと、の女御

黒 まふおはしり給はすは、みやなとはとうくうの左の

~~~~~  
女御

穂 をはしり給はすは、宮 などは春 宮 の左の

~~~~~  
女御

龍 まふおはしり給はすは、みやなとはとうくうの左の

~~~~~  
女御

（なんともいたくおとなひてすさましくのみし給ひつ、  
此ひめ君をえまほしくおほしたると中納言のすけの）

兵部卿宮が姫君への思いをくすぶらせていることを知らず、母の中宮は、長男である春宮の後宮に姫君を入内させることを考える。現時点で唯一の春宮女御に飽き足らないことを聞いているからである。この女御は春宮の宣耀殿女御のことを指す。ただし、女御の父が「右大臣」か「左大臣」かについては作中言及がない。

おと、の「女御おさなくおわしまし、よりまいりそめ給ひて」年比に成給ひぬるをさしおきてこしたてまつらんと」いとをしくて皇后宮と申をはおもわすにめてたし」（六三ウ）

宣耀殿女御が皇后宮となった場面である。ここではその



父については傍線部のように「おとど」とのみあるので、それは「右大臣」でも「左大臣」でもよい。穂久邇文庫本系統諸本の「左の女御」では意味が通じないので、「大臣」は加えるべきであるが、左右いずれかについては決定できない。

この二例（例一八・一九）においては黒川四冊本の系譜・官職が誤りかと考えられるものの、穂久邇文庫本系統諸本には異同がない。つまり、穂久邇文庫本系統の校訂を行うときに、系譜・官職に関してはほとんど全面的に黒川四冊本に基づいて校訂できるのである。黒川四冊本の本文が生成された過程は不明であるが、これだけでも黒川四冊本を見る価値はある。なお、前田家本・西園寺文庫本も系譜をすべて正確に語っているわけではなく、その点からも黒川四冊本は系譜・官職について注目すべき本文を有していると考えられる。

かつ、黒川四冊本には先述したように明らかな脱落は見当たらない。解釈上誤りと判断できる本文も例五・八のように軽微な誤り、見落としと考えられるものが多く、本文が誤りだと積極的に認められるものは数少ない。<sup>(27)</sup> つ

(二四)

まり、黒川四冊本は穂久邇文庫本・龍門文庫本の誤脱をしばしば補える本文を有するのである。一方で、黒川四冊本のみが西園寺文庫本・前田家本に近似する場合も往々にして見受けられる。

【例二〇】卷二・二二才

（おもひやれはれまもみえぬ五月雨にとはてほと）ふる袖のしつくとかを、せたまへる御でれいのなへてならす）

前 めてたきにも何 事 もかくのみよろつくしたまは  
ゝゝゝ となをあかす

黒 めてたきにも何 事 もかくのみ  
ゝゝゝ と あかす

穂 めてたきにもなに事 もかくのみ  
さりけんとなをあかす

龍 めてたきにもなにこともかくのみ  
さりけん と あかす

盛 めてたきにもなに事 もかくのみ  
さりけんとなをあかす

（おほゆるそあまりおほけなきや）

朱雀院の一品宮に対して、苔衣大將が「この筆跡のよ  
うに、すべてを備えていたら（結婚相手として満足だろ  
うに、そうではないので飽き足りない）」と思う文脈であ  
る。穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本に共通する本文  
では「何事もこればかり備えていらつしやらなかったの  
だろう」となつてしまい不自然である。

【例二二】卷一・五才

前二 葉よりことなるはなはえたりとも盛 の春

は

黒 ふたはよりことなるはなはえたりともさ<sup>く</sup>かり<sup>の</sup>はる

は

穂 ふたはよりことなるはなはえたりともひ<sup>さ</sup>かり<sup>の</sup>春

は

龍 ふたはよりことなるはなはえたりともひ<sup>さ</sup>かり<sup>の</sup>春

は

盛 ふたはよりことなるはなはえたりともひ<sup>さ</sup>かり<sup>の</sup>春

は

（みもしはてしを）

これは、女兒出産を祈願した女君が石山寺で受けたお

告げであり、幼いころから格別な花（姫君）を得たとし  
ても、その春は見果てることはないだろう、という歌意  
である。本文は、その花のつぼみが「ひらける」春なの  
か、その花の「盛りの春」なのかで対立を見せる。<sup>(28)</sup> どちら  
が正しいかは即座に判断できないが、四本のうち、黒  
川四冊本は最も前田家本に近い。以下、黒川四冊本が前  
田家本・西園寺文庫本と一致し、他三本と対立する例を  
挙げる。

【例二三】卷四・一八ウ

（見すしらさん人のやうにおほしいり）

前 たりつる御氣しきのうらめしさをおもひはなれたて

まつらぬこゝろよ

西 たりつる御氣しきのうらめしさをおもひはなれたて

まつらん心よ

黒 たりつる御けしきのうらめしさを○<sup>おもひ</sup>はなれたて

まつらぬ心よ

穂 たりつる御けしきのうらめしさを思ひすてたて

まつらぬ心よ

龍 たりつる御けしきのうらめしさをおもひすて奉

りぬ心よ

盛 たりつる御けしきのうらめしきをおもひすて たて

まつらぬ心よ

前 はさもわれなからうらめしくなん

西 はさも我 なからうらめしくなん

黒 わさも我 なからうらめしくなん

穂 はさも心うくて

龍 わさも心うくて

解釈に大きな違いはないが、黒川四冊本・前田家本・

西園寺文庫本が一致し、穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛

岡本と対立している。

### 【例二三】 卷四・一一ウ

前 いまはとてわかれはてなはおなくはいのちも

西 今 はとてわかれはてぬるおなくはいのちも

黒 いまはとてわかれはてぬるをなくはいのちも

穂 けふやさはわかれはてぬるおなくはいのちも

龍 けふやさはわかれはてぬるおなくは命 も

(ともにかきりてしかなとてしのひかねつ、いみしうな

き)

(二六)

和歌の初句が、完本四本の中では黒川四冊本のみ「いまはとて」となっており、前田家本・西園寺文庫本と一致する。なおこの和歌は、春宮に入内する姫君に、兵部卿宮が恋慕を訴える場面で詠みかけるものである。この場面そのものが『狭衣物語』の、斎院に卜定された宮に、狭衣が思いを訴える場面を下敷きにしており、和歌も狭衣が詠んだ「今日やさはかけ離れぬる木綿襷などそのかみに別れざりけん」(『狭衣物語』巻二)を元になっている。模倣元に近いのは、黒川四冊本以外の「けふやさは」の方であるが、いずれでも意味は通じる。ただし、兵部卿宮はこの歌の一つ前に「人しれずおもひしのびてけふやさはふかきころのほどをしらせん」という歌を詠んでおり、重ねて「けふやさは」を用いるのは歌の単調さ、語彙の少なさを示すものになりかねない。<sup>(29)</sup>

以上示した通り黒川四冊本は、穂久邇文庫本系統諸本の中で最も前田家本系統諸本に近似する。その中でも、例二三において黒川四冊本は西園寺文庫本と完全に一致するが、前田家本とは微妙に異なる。この傾向は西園寺文庫本が現存する巻三・四で概ね一貫する。例を示す。

【例二四】 卷四・九ウ

|            |              |            |              |        |        |        |        |        |
|------------|--------------|------------|--------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 穂          | 黒            | 西          | 前            | 龍      | 穂      | 黒      | 西      | 前      |
| ま、にひとへには、君 | ま、にひとへには、きみの | ままにひとへには、君 | ま、にひとへには、君   | 心      | こ、ろ    | 心      | 心      | こ、ろ    |
| に          | やうにおわする      | やうにおはするをおは | いとやうにたまへるをおは | つよき    | さ      | つよき    | つよき    | さ      |
| を          | を            | を          | を            | なを     | なを     | なを     | なを     | なを     |
| おはする事おは    | を            | を          | を            | うや     | うや     | うや     | うや     | うや     |
|            |              |            |              | ましく    | ましく    | ましく    | ましく    | ましく    |
|            |              |            |              | おほさるおい | おほさるおい | おほさるおい | おほさるおい | おほさるおい |
|            |              |            |              | おほさるおい | おほさるおい | おほさるおい | おほさるおい | おほさるおい |

龍 ま、にひとへには、きみにて おわする事おは

宮は

みやは

（一かたならすあはれに見たまふ御もきはてぬれは）

前田本と西園寺文庫本・黒川四冊本の波線部を比較すると、「やうに……る」は共通祖本から分かれたか、影響関係にあると推測される。

こは例五の直後にあたり、中宮（姫君の伯母）に引き取られた姫君が裳着を行う場面である。姫君が母に似ていることをしめじみとご覧になる「おは（を）宮」もしくは「大宮」は誰か、が問題となる。全集では「大宮」と解釈されているが、これまで作中で大宮と呼ばれていた人物は嵯峨院の中宮であった人物であり、この場面の後も、「大宮」と呼ばれるのはこの人物である。<sup>(30)</sup>「大宮」は巻三で出家し、嵯峨院と共に嵯峨に隠棲しているもので、この場面にはふさわしくない。「おは」すなわち祖母と考えるべきであろう。<sup>(31)</sup>そうすると、この部分に限ると、前田家本よりも西園寺文庫本・黒川四冊本の方が自然な本文であると考えられる。

西園寺文庫本の本文自体は、全体としては黒川四冊本よりも前田家本にかなり近い。ただし黒川四冊本が西園寺文庫本・前田家本と一致する箇所においては、黒川四冊本は前田家本よりも一貫して西園寺文庫本に近似することは確かである。

ここから考えられる可能性は二つである。第一は、黒川四冊本もしくはその祖本が、西園寺文庫本のような本文を持つ完本と、穂久邇文庫本もしくは龍門文庫本のような本を両方手元に置いて本文を校訂した可能性である。この場合、黒川四冊本の本文の作成者は、『苔の衣』の系譜・官職をほとんど全て正確に読み解ける人物であったことになる。ただし、例一八の黒川四冊本の本文は読み解こうとすると明らかにおかしく、官職を正確に理解した書写者がこれを放置する理由が説明できない。

第二は、黒川四冊本もしくは西園寺文庫本が、前田家本系統と穂久邇文庫本系統に分かれる前の原形に近い本文を有している可能性である。

いずれにしても、西園寺文庫本についても本当に混雑本文であるのかというところから改めて検討する必要がある。

あり、西園寺文庫本・黒川四冊本は本文の生成過程を論じるために重要な存在であると考えられる。

『苔の衣』の本文生成過程を明らかにするには、穂久邇文庫本系統諸本と前田家本系統諸本の異同についてのより精密な比較検討が必要である。現時点では、穂久邇文庫本系統諸本よりも前田家本系統諸本の本文の方が全体的に説明が詳しく、より解釈しやすい傾向があることを指摘しておきたい。

## 六、おわりに

本稿では、穂久邇文庫本系統諸本のうち、位置づけが不明瞭であった完本四本を比較し、本文異同を分析した。その結果四本の本文は、黒川四冊本／穂久邇文庫本／龍門文庫本・盛岡本の三つに分類され、盛岡本は龍門文庫本の下位に位置づけられること、穂久邇文庫本には誤脱もあり、穂久邇文庫本のみを代表本文として取り扱うのは不十分であること、これまで注目されて来なかった黒川四冊本・龍門文庫本にも目を向けるべきであることが

明らかになった。

龍門文庫本は、穂久邇文庫本・黒川四冊本の誤脱を補い、生成過程を論じる材料として有用である。黒川四冊本は、穂久邇文庫本系統の校訂を行うときに、系譜・官職に関しては全面的に黒川四冊本に基づいて校訂できるという意味で注目に値する。また他本と比較したときに脱落が見当たらず、黒川四冊本によって『苔の衣』を読んだとき、意味が通じない箇所、誤りだと判断できる箇所は少ない。ただし、穂久邇文庫本系統完本のうち、黒川四冊本のみが西園寺文庫本・前田家本と一致し、穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本と対立する箇所もしばしば見受けられる点には注意を払う必要がある。

ここからは黒川四冊本が西園寺文庫本と共に、原形に近いか混態本文かに関わらず、『苔の衣』本文の生成過程を論じるために重要な存在であることが読み取れる。

今後は『苔の衣』本文の生成過程を明らかにするために、黒川四冊本・西園寺文庫本について、混態本文か否かも含めて精査し、伝本分類を見直すことが課題である。

本稿作成に際し、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長の佐々木孝浩氏に詳細な書誌についてご教示を賜りました。また、文科省の舟見一哉氏にご教示・ご助言賜りました。厚く御礼申し上げます。

また、原本調査の許可をくださった皆様に御礼申し上げます。

## 注

(1) 後嵯峨院時代（後嵯峨即位の仁治三年（一二四二）から崩御の文永九年（一二七二）年までを指す）に成立したと思しい。『風葉和歌集』に二首入集していることから、その成立の文永八年（一二七二）までに成立したとされる。

(2) 拙稿『『苔の衣』穂久邇文庫本系統卷一・四相当諸本について』（『年報新人文』一六号、二〇一九年二月）、『『苔の衣』金沢大学附属図書館蔵本及び京都市歴史資料館蔵本について』（『京都大学國文學論叢』四三号、二〇二〇年四月）

(3) 麻原美子『『苔の衣』絵巻の研究と本文（二）』（『日本女子大学紀要（文学部）』三六号、一九八七年三月）

(4) 立命館大学図書館西園寺文庫所蔵『こけ衣』(立命館大学アートリサーチセンター古典籍ポータルデータベース詳細書誌情報 <https://www.dh-jacnet/db1/books/results-detail.php?fl=SB3475&center=portal> 二〇二〇年七月一日最終閲覧)

(5) 今井源衛校訂・訳注『中世王朝物語全集七 苔の衣』(笠間書院、一九九六年)の解題によれば、完本は穂久邇文庫本・盛岡公民館本のみとあるが、これは誤りである。

(6) 古典文庫『苔の衣』(一九五四年)

(7) 同じ手法で作られた例として、国文研所蔵の『卑懐集』(姉小路基綱の歌集)があるとご教示いただいた。

(8) 横井孝「実践女子大学図書館蔵『苔の衣』(五本)」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』一一号、一九九二年三月)

(9) 奈良女子大学学術情報センター阪本龍門文庫善本電子画像集古写本の部『苔の衣』(<http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y05/y055/二〇二〇年七月一日最終閲覧>)

(10) 注(四) 詳細書誌情報に拠る。

(11) 『け衣』(尊経閣叢刊、一九三九年)

(12) 『苔の衣』より成立時代は少し下るが、「誦誦威力聖霊決定 聖霊決定往生淨利」という句が『法守親王曼陀羅供次第』(貞治二年(一二六三)成立)にも見られる。

(二〇)

(13) ちなみに西園寺文庫本は「かきつらむよとむかひ給ふこゝちしてあはれにおほささる」となっており、穂久邇文庫本系統諸本の本文の方が解釈する上では自然である。

(14) いずれも一〇―二〇字程度である。一例を挙げる(巻四・三ウ)。

(心ちして中納言よくつのちの事なとさたしきこえ)

前 給ふ 人しれぬ姫 君はおひ出 給 ふまゝにいと  
うつ

西 給ふ 人しれぬ姫 君はおひいて給 ふまゝにいと  
うつ

黒 たまひし人しれぬひめ君はおい 給 ふまゝにいと  
うつ

穂 給 ふまゝにいと

龍 たまひし人しれぬひめ君はおい たまふまゝにいと  
うつ

盛 たまひし人しれぬひめ君はおい たまふまゝにいと  
うつ

(くしきをかなしき物にしたまひしかと)

双子姉君の母は中納言に盗み出された後、双子姉君を手元に引き取って育てていたが、心労もたたつて亡くなつて

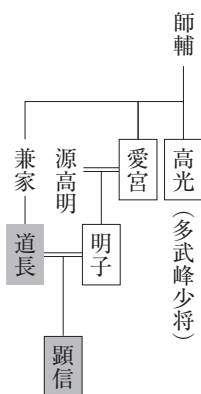
しまった。中納言は自分のせいであるような気がして法事などを沙汰した。人知れず育てられた姫君が成長するにつれてたいそうかわいらしいのを、中納言は愛しく大切に扱ったが、彼もしばらくして亡くなってしまう。西園寺文庫本・前田家本はこう読める。穂久邇文庫本を除く完本三本は、「おい給ふ」だと意味が通じにくく、また「たまひし」は「姫君」を修飾するので、「彼女の母の死が自分のせいであるような気がして）中納言が万事沙汰し申し上げなされた姫君は」と解釈できる。

穂久邇文庫本は「中納言は万事沙汰するにつれて、たいそうかわいらしいのを愛しいものだ扱ったが」という意味となり、「かわいらしい」の主体が何か判明しない。ただし、この直後「おきたまふ事もなくてうせ給ひしかは少納言のめのとなくくむかへととりてわたくし物におもひつ、いかにせましとおもふに」とあるので、「うつくし」かったのが「姫君」であるという判断を下せはする。

(15) 「大宮うば宮」の場合、「うば（祖母）宮」は中宮の母、つまり姫君の祖母を指すことになる。それは納得できるが唐突に「大宮」が登場するのが不審である。「大宮おとゞ」の場合、関本の北方が「大宮」と呼ばれていることになり、不審（後述例二四及び注（三〇）（三一）参照）。

(16) 「ら（良）」か「、」か紛らわしい。

(17) 『苔の衣』が敢えて阿私仙の系譜を示した意図は、阿私仙と苔衣大将の血縁関係が、藤原高光と藤原顕信（道長息）の血縁関係を踏まえていることを示すことにあると指摘した（『苔の衣』の大将の主人公性）（『国語国文』八二巻七号、二〇一三年七月）。



(18) 三字以上の独自異文は卷一箇所、卷二箇所、卷三箇所、卷四箇所。

(19) 穂久邇文庫本・龍門文庫本とも「なつみ水くみても」。

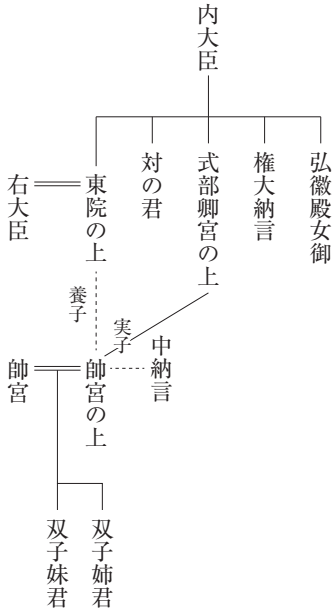
(20) 龍門文庫本・盛岡本に一〇字以上の明らかな脱落が共通するのは、卷一で一箇所、卷二で一箇所である。

(21) 表記の違い以外では、五字以上の異同は存在しない。

(22) その他の三本に無い本文は、次の例である（巻三）。

おなしこと、いひなから、さふらふ人く／＼なともこひしのひ」きこゆるさまことほりにすすきたり我もく／＼





との、うちは」のこりなくまいるかきりあれば大将殿  
などのうす、み色なる」ころもきたまふにつけても(二  
八ウ)

穂久邇文庫本・龍門文庫本・盛岡本には傍線部「のこり  
なくまいる」はない。ただし、この部分は前田家本・西園  
寺文庫本にはある。

(23) 拙稿『『苔の衣』系譜考』(『京都大学国文学論叢』三〇  
号、二〇一三年九月)

(24) 注(二三)内で作成したものを基に作成した。

(25) 例を示す(巻四・二九才)。

前 しもあらすまつこは、きみをは

(三二)

西 しもあらすまつ古は、君 をは  
こ

黒 しもあらすまつのは、きみをはこみきのおと、のうへ  
はこ

穂 しもあらすまへのは、君 をはこ右 のおと、のうへ  
は此

龍 しもあらすまつのは、きみをはこみきのおと、のうへ  
は此

前 うちのおと、に むかへきこえてま  
たなく

西 うちのおと、にものし給 ひしかはむかへ聞 えてま  
たなく

黒 うちのをと、に物 したまひしかはむかへきこえてま  
たなく

穂 うちのおと、にものし給 ひしかはむかへきこえてま  
たなく

龍 うちのおと、に物 し給 ひしかはむかへきこえてま  
たなく

これは、双子姉君の系譜を、対の君という女性が語る場

面である。双子姉君の亡くなった母（帥宮の上）はまず、東院の上（故右大臣の上）に養女として迎えられた、という文脈であろう（系図参照）。双子姉君の亡き母を、故内大臣が養女として迎えて可愛がった、というのでは物語の内容に相違する。亡母が内大臣のところにいたので迎えたという解釈もおかしい。この例では、前田家本・西園寺文庫本よりも、穂久邇文庫本系統の完本の方が意味が通る。

（26）例五「をほしかられて」、例八「なつみ、つゝみて」の傍線部などは黒川四冊本の誤りだと考えられる。

（27）文意が通らない例を二つ示す。

【卷一・三四オ】

（ものゝさと）ししければいかさ○まにものとかにとおほして四月ついたち」

前に御くにゆつりありわか宮春宮にゐさせ給ぬる事

をあるへき

黒に御くにゆつり○わか宮にゐたまひぬる事

をあるへき

穂に御国ゆつり有わか宮春宮にゐ給ひぬる事

をあるへき

龍に御くにゆつりありわか宮春宮にゐたまひぬる事

をあるへき

「若宮」が何になったか、すなわち「春宮」になったと本文中に説明がなければ黒川四冊本は意味が通らない。

【卷二・二九オ】

（中納言のおはしたるにしのひつゝさまことにめて）たきことをいひきかせたてまつるにれいのおほけなき心」

前つかひにいかにもしてひと夜みせよとのみせめきこ

え

黒つかひにていかにもしてひと夜見せよとのみも見せた

め

穂つかひにていかにもして一夜みせよとのみせめきこ

え

龍つかひにていかにもしてひと夜見せよとのみも見せた

見

盛つかひにていかにもしてひと夜見せよとのみもみせた

み

（給へはうへにかくなときこゆればうちをみていとときぞくよけにて心にこそとゆるしたまへは）

「いかにもして一夜見せよ」と、中納言が女房を責める場面である。「一夜見せよ」とのみ責め聞こえ給ふ」であれば意味が通じるが、「一夜見せよ」とのみもみせたため」では不明である。ここでは、前田家本と穂久邇文庫本が一致

し、かつ意味が通じる。黒川四冊本・龍門文庫本・盛岡本は似通うため、祖本が「とのみもみせたため」のような本文を有していた可能性が高い。

(28) 『苔の衣』成立前後の和歌において「(花が) ひらけん(む)」は、「思ふかなささちる色をながめてもさとりひらけん花のうてなを」(『拾遺愚草』)をはじめ、「こころざしふかくはこべるみやたてをさとりひらけん春にたぐへよ」(『山家集』下)、「見てしかなうきよのかすみぬぎ捨ててさとりひらけん花の衣を」(『後堀河院民部卿典侍集』)や、「くらべ見るみのりのちゑのはなならば今日やはつかにつほみひらけん」(『弁内侍日記』)、「さまざまののりのかざりのはなの色もおなじ時にやさとりひらけん」(『実材母集』)など、「さとり」「御法」などと共に用いられる用例が多い。比較すると、「雲のうへの山もこだかき桜花みよの盛の春にあふらん」(『院御歌合宝治二年』十四番右負・山花・小宰相)のように、「さかりの春」の方が姫君の将来を指す表現としてはふさわしいと考えられる。

(29) ただし『苔の衣』の作者は歌に巧みではないので、原形が「けふやさは」であった可能性も排除できない。

(30) 「さかのゐんに大みやの入道みやなといかゝ心ほそくてすきさせたまふらんとおもひやりつつつねにとぶらい給

ふ」(卷四六三オ・ウ)等の例が挙げられる。

(31) 「をば」すなわち伯母の可能性も排除はできない。

(二四)